

氏 名	寺本 健三
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6 5 0 号
学位授与の日付	平成 24 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学 位 論 文 題 目	狩野尚信の画業からみた江戸狩野成立の研究
審 査 委 員	(主査)教授 並木誠士 教授 伊藤 徹 教授 秋富克哉 京都市立芸術大学美術学部総合芸術学科准教授 田島達也

論文内容の要旨

本論文は、序章・終章と第 1 章から第 5 章までで構成されている。

「序章 江戸初期の美意識」では、本論文の目的を述べたあと、それを江戸時代初期の社会、文化に位置づけている。とくに、寛永年間の文化とそこにおける狩野派のあり方を概括するなかで、本論文の独自の視点を明らかにしている。

「第 1 章 尚信研究・評価の変遷をめぐって—『槐記』を中心として—」では、岡倉天心、美術雑誌『国華』などによる言及も視野に入れながら、尚信についての研究史と現時点で概説的に理解されていることをまとめ、そのうえで、江戸時代以降明治時代にいたるまでの尚信の評価について、尚信が登場する数少ない文献のひとつで、尚信を高く評価する近衛予楽院の『槐記』の記述に分析を加えている。

「第 2 章 「驪黄物色図」模本から探る制作意図と特色」では、原本は所在不明ながら、尚信筆の伝承をもつ模本が現存する驪黄物色図の諸模本を比較検討することにより、尚信の絵画制作の意図を抽出している。模本を扱うという、美術史学ではタブー視されている方法論をあえて選択することにより、従来、明らかではなかった本図制作における尚信の意図を明らかにしている。この章は、驪黄物色図を論じたはじめての論であり、尚信研究のみならず狩野派研究にとって、あらたな問題を提起した重要な論述になっている。

「第 3 章の 1 作品論 1 二条城黒書院障壁画の再検討—狩野興以の影響—」は、尚信の現存する数少ない着色画である二条城黒書院障壁画の様式分析をおこない、そこにおける狩野興以の存在の重要性を指摘すると同時に探幽との比較もおこなう。注目されることのすくなかった杉戸絵をも視野に入れて詳細な議論を展開している。

「第 3 章の 2 作品論 2 尚信芸術の開花と展開」では、「尚信芸術の開花と展開」として、申請者が尚信筆と考える作品を俯瞰的にあつかい、その様式的な特徴を指摘する。この部分は個別の作品論となっており、第 4 章の編年作業とともに、論文全体の中でも重要な位置を占めている。

「第 4 章 狩野尚信画業の編年試論」では、尚信の作品を制作年代順に並べる作業をおこなっている。従来、襖絵など制作年代の判明する作品を除き、制作年代が明確にならなかった作品群を様式的に分析し、その編年を試みている。資料の決定的な不足によりあくまでも試論にとどまっているが、従来なされてこなかった作業を緻密におこなったことは評価に値する。

「第 5 章 探幽様式と尚信画風の比較について」では、狩野探幽の様式＝江戸狩野様式という図式に見直しを図る章で、両者の作品を比較しながらそれぞれの求めている表現の違いをあぶり出している。ここでは、尚信の作品には探幽に見られない機知的な構図、構成が多いこと、尚信が、探幽とは異なり中国宋代の減筆体の再現を目指していたことといった尚信の個性が指摘されている。

「終章 結論」では、これまでの章で明らかにしてきたことをまとめて、江戸狩野における尚

信の位相を的確に指摘している。

以上のように、本論は、従来作家研究がほとんどなかった狩野尚信を取りあげ、地道な作業を積み重ねることにより、その特質を明らかにした論文であり、その成果が学会に寄与することは明らかである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来注目されることのすくなかった江戸時代初期の絵師狩野尚信の画業に焦点をあて、精緻な作品分析をおこなうことにより、江戸狩野における尚信の位置を明らかにしたものである。

江戸時代の狩野派は、狩野探幽が登場して、桃山時代の狩野永徳風とは大きく異なる瀟洒な画風を確立し、それが江戸狩野様式として定着し、さらに狩野安信の画論『画道要訣』にみるような「学画」の考え方により、周辺絵師あるいは後継絵師に継承されてゆくという考え方が、これまで支配的であった。そこにおいては、探幽の弟狩野尚信は、忠実に江戸狩野様式を実践した絵師の一人ととらえられていた。それに対して、本論文では、尚信の作品の編年作業からはじめて、その様式展開を克明に追跡し、探幽の様式とは異なる尚信の個性を抽出することに成功している。

本論文が独自の価値を有する第一の点は、上述のように、これまで狩野探幽の陰にあって制作年代の確定や様式変遷が確認されていなかった狩野尚信の作品を詳細に分析して、編年作業をおこなったことである。そのうえで、筆者は、探幽とは異なる機知と減筆体への志向という尚信の個性を読み取り、江戸狩野における尚信の位置を確認し、従来の江戸狩野観の修正を迫っている。これが、本論文の独自性の第二点である。

上記のように、本論文は基礎的な作業を踏まえて、さらに独自の視点からの考察を展開したものとして、十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の 2 論文（①②）および査読無しの 3 論文（③～⑤）として、すでに公表されている。

- ①寺本健三：「狩野尚信筆「驪黄物色図」に関する一考察—知られざる走獣画の制作意図とその特色—」美術史学会『美術史』第 171 号、32 頁-47 頁（2011 年）
- ②寺本健三：「狩野尚信画業の編年に関する一試論」意匠学会『デザイン理論』第 59 号、49 頁-63 頁（2011 年）
- ③寺本健三：「白馬を「あおむま」と言うこと—馬の毛並みと五行説—」『史跡と美術』818 号、261 頁-263 頁（2011 年）
- ④寺本健三：「女絵師清原雪信と狩野雪姫」『史跡と美術』821 号、17 頁-20 頁（2012 年）
- ⑤寺本健三：「狩野尚信と絵馬」『史跡と美術』第 823 号、72 頁-76 頁（2012 年）